

「太平洋漏水孔」漂流記

小栗虫太郎

青空文庫

竜宮から来た孤児

前作「天母峯」で活躍した折竹孫七の名を、読者諸君はお忘れではないと思う。

アメリカ自然科学博物館の名鳥獣採集者として、オフ非番でも週金五百ドルはもらう至宝的存在だ。その彼が、稀獣矮麟オカビを追い、マズク・オクゼン麝牛をたずね、昼なおくらき大密林スポンの海綿ジ・ソイル性湿土をふみ、あるいは酷寒水銀をくさらす極氷の高原をゆくうちに、知らず知らず踏破した秘境魔境のかずかず。その、わが折竹の大奇談の秘庫へ、いよいよこれから分け入ってゆくことになるのだ。

「おい、海を話せよ、君も、サルガツソウ藻シー海ぐらいは往ったことがあるだろう」

とまず私は困らせてやれとばかりに、折竹にこう訊いたのである。

というのは、海に魔境ありということは未だに聴いてないからだ。絶海の孤島、といえばやはり土が要る。たいていは、大陸の中央か大峻険の奥。密林、氷河、マイアスマ毒瘴気の漂う魔の沼沢と——すべてが地上にあつて海洋中にはない。ただ、あるとさえば藻海くらいだろうが、それも過去における魔境に過ぎず……いまはその怪馬尾藻ほんだわらも汽船の推進器スクリュウが

切つてしまふ。

大西洋を、メキシコ湾流がめぐるちようどまっ唯中、北緯二十度から三十度辺にかけておそろしい藻の海がある。

これは、紀元前カルタゴの航海者ハノンが発見したのが始め。帆船のころは、無風と環流のためそこを出られなくなり、舵器には馬尾藻ほんだわらがぬるぬると絡みついてしまふ。そういう、なん世紀前かしれぬボロボロの船、帆柱にもたれる白骨の水夫、それを、死ぬまで見なければならぬ新遭難船の人たち。絶望、発狂、餓死、忍びよる壊血病。むくんだ腐屍の眼球をつつく、海鳥の叫声。じつに、凄惨といおうか生地獄といおうか、聴くだに慄つとするような死の海の光景も、いまは藻サルガツソウ海シーのおい過去のことになっている。

では、海に魔境は絶対ないと云えるのか?! そういうと、折竹は呆れたような顔をして、「オイオイ、俺だからいいようなものの、他人には云うなよ。今どき、藻サルガツソウ海シーなんて古物をもち出すと、君の、魔境小説作家たる資格を疑うものがでてくるからね。だが、じつさい海には魔境といえるものが、少ない。彼処に一つ、此処に一つと……マアそれでも、三つくらいあるだろう」

全然ないと思われた海洋中の魔境が、折竹の話によれば三つほどあるという。ゆけぬ魔

海——それはいつたい何処のことだろう。また、陸の未踏地のごとく全然人をうけつけぬ、その海の魔境たる理由？ しかも、それがわが大領海「太平洋」中にあるという、折竹の言葉には一驚を喫しないわけには往かない。

「それが、東経百六十度南緯二度半、ビスマルク諸島の東端から千キロ足らず。わが委任統治領のグリニツチ島からは、東南へ八百キロくらいのところだ。つまり、わが南洋諸島であるマイクロネシアと、以前は食人種の島だったメラネシア諸島のあいだだ。そこに、世界にもう其処だけだという、海の絶対不侵域がある」

「ほう、まだ未踏マーレ・インコグニタの海なんてこの世にあるのかね。で、名は？」

「それが島々でちがうんで色々あるんだがね。ここでは、いちばんよく穿っているニューギニア土人の呼びかたを使う。『Dabukku』ダブツクウ——。つまり『海の水の漏れる穴』という意味だ」

土人の言葉には、ひじょうに幼稚な表現だが奇想天外なものがある。この『Dabukku』ダブツクなどもその一つ。直経百海里にもわたるこの大渦流水域を称して、「海の水の漏れる穴」とはよくぞ呼んだりだ。

そこは、赤道無風帯のなかでいちばん湿熱がひどいという、いわゆる「レジョン・オブ・クラ熱霧」

の「環」のなかにある。そしてその渦は、外辺は緩く、中心にゆくほど早く、規模でも、「メールストレームの渦」の百倍くらいはあろう。ましてこれは、鳴門やメールストレームのような小渦の集団ではなく、渺茫数百海里の円をえがく、たった一つの渦。

周縁は、海水が土堤のように盛りあがっている。ことに、地球自転の速力のはげしい赤道に面した側は、まさに海面をぬくこと数メートルの高さ。さながら、大環礁アトールの横たわる心地す——とは、はじめて “ [Dabukku] ” をみた De Quiros の言葉だ。

この、オウストラリア大陸を発見し損なつたそそっかしいスペイン人が、 “ [Dabukku] ” を最初みたのが十七世紀のはじめ。しかし彼は、この化物のように盛りあがった水の土堤に、舵をかえして蒼惶と逃げ出した。そしてそこを、雲霧たちこめるおそろしい湿熱の様から、 “ Los Islas de Tempetuas ” と名づけた。すなわち、「颶風の発生域の島々」という意味。

「なるほど」

と、もう私は一、二尺のりだすような亢奮。しかし、いまの説明のなかに判じられないようなものがある。

「その、島々というのはどういう意味だね。 “ [Dabukku] ” のなかには、島があるの

か？」

「そうだ、大小合して七、八つはあるらしい。その何百、何十万年かはしらぬが隔絶した島のなかを、君は一番覗きこみたいとは思わないかね」

と、なにやら仄めかし気にニツと笑った折竹の眼は、たしかに私を驚死せしめる態の大奇談の前触。そしてまず、『Dabukku』《ダブツクウ》の島々について語りはじめた。

「ニューギニア土人は、その黒点のようにみえる島を穴と見誤った。海水が、ぐるりから中心にかけて、だんだんに低くなってゆく。それを、勾配のゆるやかな大漏斗のように考えた。つまり、その穴から海水が落ちる。そのため、こんな大きな渦巻ができる、いかにも奴等らしい観察が、『Dabukku』^{ダブツクウ}の語原だよ」

「ふうむ、太平洋漏水孔か……」

「そうだ、案外渦の成因はそんなところかもしらんよ。ところで、なぜ『太平洋漏水孔』^{ダブツクウ}のなかへ踏み入ることができないか。

一九一二年に、当時の独逸ニューギニア会社の探険隊が、『太平洋漏水孔』^{ダブツクウ}へ入ろうとした。そのとき、はじめて魔海のおそろしさがハッキリと分ったのだ。それは、『太平洋漏水孔』の海面下が一面の暗礁で、小汽艇のようなものでも忽ち覆えってしまう。つまり、

縦に突つきろうにも渦流にまかせようにも、重さと抵抗をもつ汽艇のようなものは駄目なんだ。ただ、どうかと思われるのがアウトリガード・カヌー桁付き独木舟だ。

こいつは、目方も軽いし抵抗も少ない。ふわふわ渦にのってゆくうちに、どれかの島へゆけるだろう。と、マアその考えもそこまでは良いんだがね。考えると、それでは行きつきりになってしまう。渦が逆流でもしないかぎり……永遠の竜宮ゆきだよ」

「……………」

私は、さつきから折竹が頻繁につかう、竜宮という言葉が気になって堪らない。こいつ、何かどえらいものをきつと隠しているなど、問おうとしたのを折竹が遮って、

「それから、もう一つ『太平洋漏水孔』探険の大障害というのが、さつきも云ったひじょうな高湿度だ。なにしろ『太平洋漏水孔』の形がちょうど漏斗だからね。海面の蒸発に滞留がおこる。その探険隊が、『海メーレンス・ブラーゼロホの潮吹き穴』とそこを名づけたように、濛気赤道太陽をさえぎる大湿熱海だ。

ところで、そのニューギニア会社の探険のとき、実験がおこなわれた。それは、コックロ大蚪虫をいれた箱を『太平洋漏水孔』へ流したのだが、その、空気温度が約摂氏四十五度。

ところが、それから十分ばかり経って引きよせると、その大蚪虫の体温が空気温度と

おなじだ。君、人間が四十五度の体温にどれくらい堪えられるだろうか」

「想像もつかんよ、地球の熱極というのがあれば、『太平洋漏水孔』のことだろう」

「ふむ、ところでだ。ここに、独木舟カヌーに乗って入りこんだ、人間がいると仮定しよう。渦は、毎時周縁のあたりが三十カイリの速さ。そして、ぐるぐる巡りながら最初の島までゆくのに、どう見積つても半日は費る。するとそれまでに、その人間の命が保つかどうかということが、まず第一の問題になってくる。僕は、医者じゃないが、受け合い兼ねますと
 いたいね」

「分つたよ」

私はメモを置いて、落胆したように彼をみた。

「なるほど、人間の生理状態が一変しないかぎり、『太平洋漏水孔』へはゆけないと云うことが、分つた。だが、そんな工合で人間がゆけなくてだね、そこに奇談もなにもないものは、聴いても仕様がなによ」

すると、折竹がいきなり童顔をひき締めて、オイと、一喝するように呶鳴つた。

「おいおい、話というものはしまいまで聴くもんだ。僕が、何百、何十万年秘められていたかもしれぬ『太平洋漏水孔』の大驚異——それを話そうと思う矢先、早まりやがって…

…

「そ、そうか」

「それみろ。とにかく『太平洋漏水孔』のなかに何かしらあるらしいことは、君に作家的神経がありや、感付かにならんところだ。といつて、僕が往ったわけじゃない。じつは、ひとりそこへ入り込んで奇蹟的に生還したものがいる。そしてその人物と、僕のあいだには奇縁的な関係がある」

「なんと云うんだ！　そして、どこの国のものだ」

「日本人だ。しかも、頑是ない五歳ばかりの男の子だ」

私は、ちよつと、暫くのあいだ物もいえなかつた。読者諸君も、その五歳という文字を誤植ではないかと疑うだろう。しかし、五歳はあくまでも五歳。そこに、この「太平洋漏水孔」漂流記のもつとも奇異な点があるのだ。では、しばらく私は忠実な筆記者として、折竹の話を皆さんに伝えよう。

メラネシア
「黒人諸島」浦島

それが、第一次大戦勃発直後の大正三年の秋——。日本海軍が赤道以北の独領諸島を掃蕩しつくしたけれど、まだドイツ東洋艦隊が南太平洋にいてという頃。はやくも、新占領区域を中心に商戦の火蓋をきった、向うみずな一商会があった。それが、折竹の義兄が経営する海南社。のちの恒信社、南洋貿易などの先駆となったものだ。

独艦が出没する南太平洋を縫い、ともかく小帆船ながら新領諸島と、濠洲間の連絡を絶やさなかつたのは偉い。その、水風丸の二回目の航海、ブリック型、補助機関附きの五百噸ばかりの帆船。それが、雑貨燐鉱などをはち切ればかりに積んで、いま北東貿易風にのり赤道を越えようとしている。

若人のあこがれ、海のロマンチズムは帆船生活にある。順風に、十度ほど傾いではしる総帆の疾走。波音と、ブロックの軋めきのほかは何もない南海の夜。仰げば、右に左に弧をえがく上檣帆トゲルンセルのあいだに、うつくしい南の眼、赤十字星サザン・クロスのまたたき。折竹も、珊瑚礁生物の採集というよりも、むしろこうした雰囲気に魅せられて乗っていたのだ。やがて、北東貿易風がいつとはなしに絶え、船は、聴くだに厭な赤道無風帯ドルドラムスに入ってしまった。

「驚いたですよ、船長」

と折竹もさすがに音をあげた。

「この、補助機関の震動がするあいだは地獄というわけですね。まったく、この蒸し暑さときたら死んじまいたいくらいだ。眼がぼつと霞んで来るし、なにも考えられなくなる。

だが、あれ?!、アツ、ありや何だ」

下桁フームのしたの天幕テントのかけから、折竹が弾かれたように立ちあがった。そとは、文字どおりの熱霧の海だ。波もうねりもなく濃藍の色も褪せ、ただ天地一塊となつて押しつぶすような閃めき。と彼に、左舷四、五十鏈ケイブルの辺に異様なものが見えるのだ。環礁アトールのようだが色もちがいがい、広茫水平線をふさぐに拘わらず、一本の椰子もない。

「あれかね、あれは有名な『太平洋漏水孔ダブツクウ』の渦だよ。環礁アトールのように見えるのは、盛りあがった縁だ。とにかく、はいつたら最後二度と出られないという、赤道太平洋のおそろしい魔所なんだ」

その時、船首の辺でけたたましい叫びが起つた。一人の水夫が、檣梯リギンの途中でわれ鐘のような声で呶鳴っている。

「おうい、変なものが見えるぞう。右舷八点だ……鳥が、籠みてえなものを引いてゆくが……見えたかよう」

まもなく、その二羽の鰹鳥が射止められた。引きあげられたのは葡萄蔓の籠で、なかを覗いた男がアツと行って飛び退いた。裸体の、愛らしい五つばかりの男の子が、呼吸もかすかに昏々とねむっている。なんだ、夢ではないのか。この、ちかくに島とてない赤道下の海を、鳥に引かれながら漂う頑はない男の子。

と、しばらく全員は酔ったような眼で、暑さも忘れ、じっとその子をながめている。と間もなく、その子の背に手紙が結いつけられてあるのが、見つかった。船長が手にとったが、すぐ折竹にわたし、

「君、ドイツ語のようだね」

「そうです、読みましようか。最初に、この子の仮りの父となつて暮すこと一月。いま『太平洋漏水孔』中にある独逸人キューネより——とあります」

太平洋漏水孔——たった一字だががんと殴られた感じだ。しかも、みればこの子は日本人のようだし、どうして、あの魔海に入りどうして抜けでたのか。しばらく全員は阿呆のようになり、じりじりと照る烈日のしたで動かない。

やがて、その子は手当をされ船室で寝かされた。折竹は、いつまでも醒めない悪夢のあとのような気持、フラフラわれともなく檣舷へのぼって、いま左舷に過ぎようとする「太

「太平洋漏水孔」をながめていた。

斜めの海、海の傾斜。とうてい、夢にも思えなかったものが、現実として、眼のまえにある。そこには、幾重にも海水が盛りあがり、まつ蒼に筋だっている。その大漏斗をまく渦紋のあいだには、暗礁がたてるまつ白な飛沫。しかし、それはただ眼先だけのことで、はや四、五鏈先はぼうつと曇っている。そして、煙霧のかなたからごうごうと轟いてくるのが、「太平洋漏水孔」の渦芯の唖りか……。

折竹は、それをキューネの絶叫のように聞きながら、魔海からの通信を読みはじめたのである。

*

手紙の主フリードリツヒ・キューネは、
ドイッチェ・ノイ・ギネア・ゲセルシャフト
独逸ニューギニア拓殖会社 の年若い幹部で

あった。以前はお洒落で名高い竜騎兵中尉。それが先年、ベルリン人類学協会のニューギニア探険に加わって、以来南海趣味にすっかり溺れこみ、退役してニューギニア会社へきたのだ。スポーツマン、均斉のとれた羚羊のような肢体。これで、一眼鏡をしコルセット

をつければ、どうみても典型的貴族^{ユノケル}出土官だ。

そのキューネが、この五月に破天荒な旅を思いたち、独領ニューギニアのフィンシャハから四千キロもはなれた、かの「宝島」の著者スチーヴンスンの終焉地、Valima《ヴァイリマ》島まで独木舟^{カヌー}旅行を企てたのである。両舷に、長桁のついた、Prau《プラウ》にのって……かれは絶海をゆく扁舟の旅にでた。そして、海洋冒険の醍醐味をさんざん味わったのち、ついに九月二日の夜フィンシャハに戻ってきた。——話はそこで始まるのである。

土人の《Marabo 《マライボ》》という水上家屋のあいだを抜け、^{マンガローフ}紅樹林の泥浜にぐいと舳を突っこむ——これが、往復八千キロの旅路のおわりであった。ところが、海岸にある衛兵所までくると、まったく、なんとも思いがけない大変化に気がついたのだ。そこには、ドイツ兵士は一人もいず、てんで見たこともない土民兵が睡っている。ちよつと、ポリネシア諸島の^{ファイター・ファイター}馴化土人兵のような服装^{なり}だ。

「なんだろう。国の兵隊がいず、変なやつがいるが……」

と、見るともなくふと壁へ眼をやると、そこに、土民への布告が張ってある。かれは、みるみる間にまっ蒼になった。留守中、大戦が勃発しこの独領ニューギニアは、いま濠洲

艦隊司令官の支配下にあるのが、わかった。ことに、その布告の終りの数行をみたとき、彼はわれを忘れてかつと逆上したのである。

——濠洲軍は、なんじ等に善政を約束する。思えば、永年苛酷なるドイツ植民政策に虐げられた汝らは、ドイツ軍守備隊長フォン・エッセンに対しても、われ等と協力し復讐をわすれなかつた。彼らが、家族、敗兵らとともに密林中に逃げこんだとき、汝らはわが言にしたがい間諜をだし、たくみに彼らを導いて殲滅させたではないか。但し、隊長夫妻ならびにその一子、以下白人戦死体の首の拾得は禁ずる。

フィンシヤハ守備陸戦隊長ベレスフォード

キューネは、眼がくらくらしめて倒れそうになった。ことに、彼と仲よしだった隊長の子ウイリーの死を思うとかつと燃えあがる憤怒。鬼畜、頑是ない五歳の子まで殺さんでもいいだろう。おそらくそれは、平素恨みを抱く土人の仕業だろうが、なにより嚇かけたのはベレスフォードではないか。

と、わずか四月の間にかわつた世の中となり、いまは身を寄せるところもない今浦島と

なつたキューネは……それから先々もかんがえず怖ろしさも感ぜずに、ただフラフラと放心したように歩みはじめた。

（殺すぞ。鬼のようなベレスフォードのやつ、からならず殺つてしまふぞ）

いま、キューネの胸のなかには、それだけの事しかない。すると、月のない夜がもつての倅いとなり、ふらふら彷徨さまよううちに隊長官舎のそばへ出た。巨きな、腕ほどもある胡瓜の蔭に、ちらつと灯がみえる。窓はあけ放され、部屋の中が見える。壁には、子供がかぶるピエロの帽子。卓には、オモチャの喇叭ラッパや模型の海賊船ヴァイキング・シップ。

（ようし）彼はぐびつと唾をのんだ。

眼には眼、歯には歯だ。ベレスフォードに、男の子がいるとは……天運とはこのこと。と、ただ復讐一図に後先もかんがえず、やがて、ちいさな寝台から抱えあげたその子を、毛布にくるんでそつと持ちだしたのである。まもなく、夜風をはらんだ独木舟プラウの三角帆が深夜のフィンシヤハを放れ矢のようにすべり出た。

しかし、キューネは、くらい海上にでるときすがに亢奮も醒めた。いま、父母の懐ろから拉しこられたにも拘わらず、ベレスフォードの子はかるい寢息をたてている。この、無心神のような子になんの罪がある!! いかにも、復讐とはいえどうして殺せようと、一度理性がもどれば飛んだことをしたと急にキューネはその子が不憫になってきた。

どれどれ、すぐ坊やお家に戻してやるよ——と、もともとキューネは子供好きだけに、毛布をあげてそつと顔を見ようとした。

夜が明けかかり、星影がしだいに消えてゆく。当て途なく流れてゆくこの独木舟プラウのうえにも、ほの白い曙のひかりが漂つてきた。すると、いきなりキューネがハツと身を退くような表情になり、

「ちがう、こりや、ベレスフォードの子じやない」
とさげんだ。

白人ではない。五歳ばかりの、黒い髪に琥珀色の肌。くりくり肥つた愛らしい二重頤。
この、意外な東洋人の子におどろいたキューネは、がたがた独木舟プラウをゆすつてその子を起こしてしまった。

「オヤツ」

というようなまん丸い眼をして、しばらくちがった周囲に呆気にとられていたその子は、やがて、しくつしくつと泣きじやくりを始め、

「オジチャン、ここ、ジャツキーちゃんのお家じゃないんだね」

「そうだよ。だが、もうじきに帰してやるからね。ときに、坊やはどこの子だね」

「お父ちゃんは、日本人でジヨリジヨリ屋だい」

「ジヨリジヨリ!! ああ理^{とこ}髪屋^やさんだね。で、坊やはどこで生れたんだ」

「シドニーだよ。お母ちゃんは、去年そこで死んじまったんだ。お父ちゃんは、それから兵隊付きのジヨリジヨリ屋になって、今度も、隊と一緒にここへ来たんだがね。それも、先週の土曜にマリアアで死んじまったよ。ボクは、宇佐美ハチロウっていうんだよ」

五歳で、この畜地へきて孤独の身となるだけに、なかなか、ませてもいるし利発でもある。それから聴くと、父の死後はベレスフォードの家へきて、その、ジャツキーちゃんの遊び相手になっているというのだ。してみると、ゆうべジャツキーが壁際に寝ていたのを、キューネが見損なつたわけなのである。しかし、ともかくこの子は帰さなければならぬ。

「オジチャン、オチッコが出たいよ」

きゆうに、ハチロウが尻をもじもじしはじめた。

「だけど、ジャツキーちゃん海へオシッコすると、オチンチンを撞木鮫にとられるというよ」

と、その時どうしたとか、ハチロウの腰をおさえてオシッコをさせている、キューネの手がいきなり震えはじめてきた。遠空に、色付きはじめた中央山脈を縫いながら、するするのぼつてゆく英^{ユニオン}・国^{ジャツク}旗。しまった、もうこの子を帰そうにも帰せなくなったと――起床ラツパの音を夢のように聴きながら、かれはまったく途方に暮れてしまったのである。

天地间、いま一人のこの身の置きどころもなくなった彼は、ハチロウの処置という重荷が加わったのだ。多分、明ければハチロウの失踪に気がつくだろう。そして、この島の内外がきびしく調べられるだろう。所詮自分は、ハチロウを帰そうとしてこの辺に迂路ついてはいられない。では、これからどこへ行こうか。

周囲はことごとく英仏領諸島。蘭領も米領も、所詮ドイツ人にとっては安全の地ではない。いまこの地上に一寸の土地もなくなった。キューネはただ悶えるのみであった。そこ

へ、突然ハチロウがこんなことを云いだしたのだ。

「オジチャンの、このお舟はどこへゆくんだね。坊やのお国の、日本へゆくのか？」

「行ってもいいよ」

と、彼は眼先がきゆうに開けたような気がし、

「だけど、坊やはジャツキーちゃんのお家へゆくんじゃないのかね」

「うん、だけどね。ジャツキーちゃんはとつても威張るんだもの。あたいを、いつも慾ばりの悪殿様にして、ジャツキーちゃんの子供が退治にくるんだもの。だけど、あたいのお国の日本なら虐められないだろうね」

こんな、頑固な子が郷愁をおぼえる哀れさ。それは、やはりキューネも同じことである。オジチャンも、どれほどドイツへ帰りたいか知れないよと、口には云わないがいきなりハチロウを抱きしめ頬ずりをしながら滂沱と涙をながした。

「ゆこう坊や。坊やのお国の日本へゆこうよ」

そうして二人は、安住の地へと漂泊をはじめたのであったが……それには、まず行きようもないと云う秘境が必要だ。ところが、独領ニューギニアの最北端に、『Nord-Malekul』
『ノルド・マレクラ』という、荒れさびた岬がある。そこには、岩礁乱立で近附く舟

もなく、陸からの道には『Niningo』《ニニンゴオ》の大湿地があり、じつに山中に棲む矮小黒人種ネグリトさえ行つたことがないと云う。かれは、まず皇カイゼリン后カイゼリンオウガスタ川を遡つていった。

両側は、いわゆる多雨レイン・フォレストの森、パプアの大湿林。まい日七、八回の驟雨が降り、ごうごうと雷が鳴る。その雨に、たちまちジャングルが濁海と化し——独木舟ブラウが、大羊歯シダのなかを進んでゆくようになる。わけても、この皇カイゼリン后カイゼリンオウガスタ川はおそろしい川で、鱈や、泥にもぐつている『Ragh』《ラー》という小鱈がいる。

ほとんど哺乳類のいないこのニューギニアは、ただ毒虫と爬虫だけの世界だ。やがて、独木舟ブラウを芋蔓でつないで、いよいよハチロウを負い『Niningo』《ニニンゴオ》の湿地へとむかった。

そのあいだの密林行。繁茂に覆われた陽の目をみない土は、ずぶずぶと沢地のようにもぐる。羊歯は樹木となり巨蘭は棘をだし、蔦や、毒々しい肥葉や小蛇ほどの巻鬚が、からみ合い密生を作っているのだ。その間に、人の頭ほどもある大昼顔が咲き鸚鵡や、巨人モルフの蝶の目ざめるような鮮色。そしてどこかに、極楽鳥のほのぼのとした声がする。やがて、百足むかを追い毒蛇を避けながら、『Niningo』《ニニンゴオ》の大湿地へ出たのだった。

そこは、幅約半マイルほどの、おそろしい死の沼だ。水面は、みるも厭らしいくらい黄色をした、鉋物質の滓おりが瘡蓋のように覆い、じつは睡蓮はおろか一草だにもなく、おそろくこの泥では權オールも利くまいと思われる。そしてここが、奥パプアの最終点になっているのだ。

「坊やは、ウンチがでないかね」

「また、オジチャン、泥すっぱん亀をとるんだらう。だけど、坊やだつてそうは出ないよ」

人糞を、このんで食う泥テラピソ亀をとつては、この数日間二人は腹をみたしていた。しかし彼には、この沼をわたる方法がない。こんなことなら、むしろ中央山脈中に、原始的な生活をしている、矮小黒人種ピグミーの『Matanavat』《マタナヴァット》の部落へゆけばよかつた。

と、此処へきてはや一時間とならぬのに、キューネの面は絶望に覆われてしまった。

すると、時々とおい対岸で、パタリパタリと音がする。その、なんだか聴きようによつては人間の舌打ちのように聴える音が、万物死に絶えた沼面をわたつてくるのだ。と同時にそれに交つて、小鳥のさけぶキーツという声がある。やがて、キューネがポンと手をうって、

「分つた。ニューギニアの奥地には食肉植物の、『うつぼかずら』のひじょうに巨きなも

のがあるという話だったが……。そうだ、一番それを使って、この沼をわたってやろう」やがて、ほそい藤蔓のさきに小鳥をつけて飛ばしているうちに、キーツという叫び声とともに、ぐつと手応えがした。たしかに、「うつぼかずら」の大瓶花が小鳥をくわええたにちがいない。とそれをキューネが力まかせに引くと、一茎の攀縁一アール（百平方米）にもおよぶと云う、「ネベンテス・ギガス大うつぼかずら」がズルズルと引きだされてくる。まもなく、そうして出来た自然草の橋のうえを、二人が危なげに渡っていたのである。いよいよ、目指す、

『Nord-Malekula』《ノルド・マレクラ》”

「坊や、ここが自分、私たちのお宿になるんだよ」

「日本かね、オジチャン」

「いや、日本へゆく道になるのさ。坊やが、ここで幾つも幾つもおネンネしていると、そのうちにお迎いの船がくるよ」

そして、キューネの気もハチロウの気も落着いた。みれば、果物も豊富、魚介も充分。ここから、時機がくるまで伸々と過せると、キューネもほつとしたのであった。

しかし、そうして何事もなかったのもたった一日だけ……。翌朝、果実を見つけに茂みのなかへ入ってゆくと、ふいに、眼のまえに薄赤いものが現われた。

「あつ、何だ。サア、坊や、はやくオンブしな」

前方でも、ザクザクと草を踏む音がする。やがて、ベゴニアの藪のなかへ蹲んだその生物を、キューネがぐいと引きだしたのである。とたんに、彼はアツと叫び、思わず離すまいと双手に力をこめた。それが、人間も人間、うら若い娘だった。

「Papalangi 《パパラング》、ああ、Papalangi 《パパラング》」

とその娘が絶え入るような喘ぎをする。

Papalangi 《パパラング》とは、サモア語の白人という意味。みれば、熟れかかった桃のような肌の紅味、五体はタヒチ島土人ときそう彫刻的な均斉。思わず、キューネがほうと唸ったように、まさに地上の肉珊瑚、サモア島の少女だ。^{トウボ}

「君、そう怯えなくなつて、何もしやしないよ。だが、どうして君一人が、この Malekui

♫ 《マレクラ》 にいるんだね。サモアだろう!! サモアの娘がどうして此処にいるの」

娘が、キューネに安心するまでには長時間かかった。もし愛らしいハチロウがこの白人のそばにいなければ、おそらくこの娘は必死に逃走をはかったろう。間もなく、かの女が此処へくるについてのかなしい物語をしはじめた。娘は、名を『Nae-a 《ナエーア》』と
いう。

「私は、ながらくサモアの国王をやっている『Tamase《タマセ》』の孫です。ところが、
どういう訳でしょうか、ドイツ領事が、タマセの王系を絶やそうとするのです。祖父のタ
マセは、今から三十年ほどまえ伯林へ送られました。また、それから転々として亜弗利加
ギニアの、おそろしい土地にも送られたことがあります。

ですけど、どうしてタマセの王系がそんなに邪魔なんでしょう。父はいま、サモア酒の
中毒で廃人も同様。兄も、父に見ならつて盛んにサモア酒をのんでいます。それも、みん
なドイツ領事の薦めることなんですわ。私も、幼な心に見過せなくなりました。まだ去年
といえば十一でしたけど、父と兄を諫めたことがあります。するとそれが、なにかドイツ
領事に危険なものに見えたのでしょうか。私を、こつそり捕まえて貿易船に抛りこみ、こ
この岩礁のうえで、ポンと放したのです」

この、天人ともに許さぬ白人の暴戻は、キューネをさえ責めるように衝いてくる。まっ
たく、ナエーアが睨り泣きながらいうように、サモアへ帰れば殺されるだろうし、といっ
て、此処に一生いるくらいなら死んだほうが増しだという。まして、この『Nord-Malekul
P《ノルド・マレクラ》』は、けつして安全な地ではないのだ。

「私、まだここには一年しかいませんけど、時々、おそろしい高潮が襲ってくるのです。

その時は、木へのぼって、ぶるぶる顫えていなければなりません。そしてその潮は、この果実このみという果実このみをすつかり持つていつてしまうのです。ねえ坊や、これから坊やとオジチャンとオネエチャンと三人で、どこか安樂な島へでもゆこうじゃないの」

そうして間もなく、この『Nord-Malekula』《ノルド・マレクラ》を三人が出ていった。果実スッポンや泥亀の乾肉をしこたまこしらえて、また、独木舟ブラウーにのり大洋中にでたのだ。しかし、今度は目的地もない。ただ、絶海をめぐって、孤島をたずねよう。そしてそこが食物の豊富な常春島エリシウムであれば……。

太平洋漏水孔ダフックウの招き

「オジチャン、これで坊やたちは、日本へいくんだね」

ハチロウは、外洋へでると大悦びだったが、そんなことを聴くと、キューネは鼻の奥がじいんと滲みるような思い、自分はドイツ、ナエーアはサモアへ……。いずれも帰心矢のごとしと云いながら、帰れない身だ。よくよく、おなじ運命のものがめぐり合わせたもん

だと、ますますこんなことから結ばれてゆく三人。

独木舟、いま南東貿易風圏内にある。この雨桁付き独木舟にはひじょうな耐波性が

あつて、むかしは、ハワイ、タヒチ島間六千キロを、定時にこの扁舟が突破していたといわれる。

「なんだか、ピコ・オウ・ワケヤ赤道ピコ・オウ・ワケヤに近いようですわね」

とビスマルク諸島の北端を出てから三日目の午、ナエーアが、しばらく手をかざしながら水平線を見ていたが、そういつた。

「どうして、分るね」

「ホラ、蒼黒い筋が水平線にあるでしょう。あれが、風がちかい証拠だというんです。じきに、北の星ホコ・バアが見えるかもしれませんわ」

それまでキューネは、ただ羅針盤カンパスだけでこの舟を進めていた。いま針路は真東にゆき、エリス諸島辺へむかっている。それなのに、赤道ちかいは何事であろう。事によつたら、カイゼリン皇カイゼリン后アフガスタ川の叢林中につないで置いたあいだ、なにか羅針盤カンパスが狂うような原因があつたのではないか。そこで、念のため軽便天測具カラバツシユを持ちだして、その夜、星を測つてみたのだ。なるほど、セントウルスの二つの輝星の位置がちがう。

かれは、軽便天測具を置くとナエーアの手をにぎった。はじめて土人娘の坎の正しきを知ったのだ。

「私たちが、もしこの舟のうえに一生いるようになったら……」

ナエーアがある夜キューネにこんなことを云いだした。星影をちりばめたまっ暗な水、頭上の ラティーン・モイル 三角帆は、はち切れんばかりに風をはらんでいる。

「そうだねえ。僕らは、こんなようじや当分海上にいるだろうからね」

事実この三人は、見る島、ゆく島の人たちによって残酷に追われていた。キューネのだれにも分るドイツ訛りと、戦争が終ったか終ったかと聴くような怪しい男には、どの島民も胡乱うらんの眼をむけずにはいない。銃を擬せられて、逃げだすときの情なさ。まったく、この三人はかなしい漂泊を続けていたのだ。

しかし、この扁舟のなかの二人の男女には、たがいに木石でない以上、何事かなければならない。ナエーアは、十二とはいえ早熟な南国ではもう大人であり結婚期である。二人はだんだん、自然の慾求に打ち克てなくなってきたのである。

「私、どこでも島さえ見つけければ、一生懸命に働きますわ。あなたの、ラヴァ・ラヴァズボンも棕櫚毛でつくれますわ。それに、珊瑚礁の烏賊刺しは、サモア女の自慢ですもの」

「僕は、君の不幸にならなけりやと思うがね」

キユーネは、ふかく海気を吸ってナエーアを見まいとする。しかしその眼は、もう間もなくくるだろう、甘酔に血ばしっている。そこへ、かるい欠伸をして、ハチロウが眼をさました。

「オジチャン、もう日本へ来たのかい」

「まだまだ、坊やがそう、百もおネンネしてからだね」

「じゃ、オジチャンとオネエチャンがお父ちゃんとお母ちゃんになって……、坊やは、唯今つて日本へいくんだね」

そんなことが、ますます二人を近附けてゆくのだ。すると翌朝、サゴ椰子がこんもりと茂った島に着いた。そこは、誰もいない無人島であるが、植物は、野生のヴァラをはじめすこぶる豊富だ。三人は、ホツと重荷を下したような気になった。

「マア、なんて、いいところだろう」

ナエーアが、踊るような足取りで、水際を飛んであるいている。珊瑚虫が、紺碧の海水のなかで百花の触手をひらいている。そのあいだを、三尺もあるようなナマコがのたくり、ハーフ・ムーン半月魚という、ながい鎌鰭のあるうつくしい魚がひらひらと……。そして、森はまた

花の拱廊をつらねている。

「僕はこの島を、新日本島ノイ・ヤパンということにした。ハチロウのために、そう呼んでやろうよ」
それから二人は、なかにハチロウを挟んで森のなかへ入っていった。すると、野生のヴァニラの茂みのなかに埋もれて、いまはボロボロになっている十字架が一つある。ああ、白人の墓だ——と、キューネは、びっくりして駆けよった。風雨にさらされてまっ黒になったその十字架には、からくも次のような墓碑銘が読めるのだ。

——R・Kという女。一八八二年にこの島にて死す。夫に死なれ生計の道も尽き、土人の妻となりしがため、名を記さず。

墓碑には、簡単にそうあったのだ。しかし、みるみるキューネの面が暗くなってゆく。白人の女が暮しようもなくなつて土人の妻となつた……それを恥じて、死後も名を記さない。それなのに、いま俺とナエーアはどうなつてゆこうとしている!!

と急に、嫌悪の情がむらむらつと起つてきた。キューネにも、やはりどこかにある白人の優越感が……このたつた一度でナエーアの顔を、見るも厭なようになってしまったのだ。彼は、幾度も詰まりながら、ナエーアに嘘をついた。

「ナエーア、やはりここも不可ない島なんだ。疫病がある。それで、ここの島には誰も住むものがないと云うんだ」

「あああせつかく見付けたのに、不可ないんでしようか」

ナエーアはキューネの気持を知らず、がっかりして云った。そしてまた、独木舟の漂流がはじまったのだ。

キューネはそれ以来、見ちがえるような人間になった。ハチロウには、以前とかわらぬ親しさを見せるが、ナエーアにはほとんど物をいわない。そして、水また水の絶海の旅が続いた。

朝は、うすら青くすがすがしい海水が、昼には、ニスを流したような毒々しい藍色になる。そして夕には、水平線を焼く火焰の大噴射。そういう、まい日まい日繰り返かえされる同じような風物に、だんだんキューネに募ってくるのはおそろしい虚無。すると、ちょうどその夜あたりから、それまで吹いていた南東貿易風が弱まってきた。

「どうしたんですの。この頃は星も見ないんですね」

とハラハラしたような声でナエーアがいう。

「見ても、見なくても同じことだからね。どうせ、どこへ流れっこうが、末は分っている

よ」

それから、数日間はくもつて、暗黒の夜が続いた。風は絶え、三角帆ラティーン・セイルもだらりと垂れている。海も空気もネットリとなつて、湯気のようなガス、ねむつたような蜚り。キューネは、もうどうなるうが儘とばかりに、この四、五日は方角もみない。

とある夜、風もないのに急に波だつてきた。

「どうしたんでしょう。風もないのに、こんなに荒れてきましたわ」

ナエーアは、帆を下してハチロウの上にかけた。

波は、低く窪みひろがり泡だつて、押しよせてくる。しかし、空には突風もない。ただ水面には触れずとおく上空をゆくのか、ごうつという颯風のような音がする。ところが、空が白々となつてきた暁がた近いところに、キューネがけたたましい叫び声をあげた。

「ああ、なんというところへ来たんだ。ナエーア、こりや大変な渦だよ。ああ、太平洋漏ダブツ水孔クウ！」

「だから、だから、云わないこつちやないんですわ」

ナエーアはただハチロウを抱きながら、オロオロ声でいうだけであった。

こうして三人は、ついに「太平洋漏水孔」へ引きこまれた。海が皺だつておそろしい旋

回をしながら、ぐるぐるながい螺旋をえがいたのち、大漏斗の底へ落ちこむ。水は、紫檀を溶かしたような色で二十度ほど傾むき、いま水平線はとおく頭上にかかっている。その、はじめてみた濃藍の水壁は、ごうごうと唸る渦心の哮りよりも怖ろしい。

もうこれまでと、キューネはじつと観念した。いま、朝焼けをうけ血紅のように染まっているこの魔海の光景は、ただ熱気を思つてさえ焰の海のような。頭は茫つとなり動悸はやく、おそらくこの舟が渦心に落ちこむまでに、三人は熱気のため死んでしまふだろう。しかしキューネは、疾い呼吸を感じながらも、じつと渦をにらんでいる。

人間には、どうなつても最後まで生きようという意識がある。それがこの時に、キューネを刺戟してきたのだ。

「どうだろう、この海はこんなことではないのか。それは、渦はもとより求心性のものだが……きつとそれにつれ、うえの空気のうちきは遠心性を帯びるだろう。つまり、くるくるの中心に巻きこむ渦の方向とは反対に、うえの湿熱空気は外側へと巻いてゆく。だから、多分この湿熱帯は輪のような形でぐるりに近いところだけを巻いていないか。きつと、そこを突きぬけて中心に近づけば、案外この船は緩和圏へ出るのではないか。そうだ、この『太平洋漏水孔』には島があるということだが……」

独木舟^{ブラウー}は、その間しだいに速力を早めてゆく。傾き、飛沫をあげ、速さも約五十カイリくらいと思われる。

と、ここでキューネが狂ったのではなからうか。いきなり帆綱をもってナエーアに躍りかかった。そして、ナエーアとハチロウを胴の間に縛りつけると、二人の鼻へ粉末のようなものを詰めてゆく。それから、自分を今度は帆柱に縛りつけ、やはりさっきの粉を鼻へ詰めこむのである。やがて、死の瀬を流れてゆく渦中の独木舟^{ブラウー}のなかで、三人は微動^{はじろ}ぎもしなくなつた。

水面下の島

それでは、キューネは熱気のため気狂いになつたのか?! 早くも、湿熱環の禍いが頭へきたのか? いや、それは一人キューネだけではない。ナエーアも、ハチロウも異様なことを喚きだしたのだ。

「渦が、逆廻りし出しましたわ。ああ、私たちはここを出られるんですのね」

とナエーアの声にハチロウが続き、

「オジチャン、涼しくなってきたよ。もう、じきに日本へいけるね」

しかし、渦は依然としておなじ方向へ巻いている。空気は、湿潤高熱、湯気のようにである。けれど二人は、この熱気のために気が可怪おかしくなったのではないのだ。

キューネが、この湿熱環に堪えるため、窮通の策をほどこした。それが、もしも成功すれば起死回生を得る。

「うまく往つてくれ。ただハチロウのため、俺はそう祈る」

キューネが、しだいに朦朧となる頭のなかで叫んでいた。

「おれは、この湿熱環をいかに凌ぐか、考えたのだ。しかしそれには、毒をもって毒を制すよりほかにない。この摂氏四十五度もある大高温のなかにいれば、まずなにより先に気が可怪しくなってくる。

しかしその前に、こつちから進んで人工の狂気をつくつたら、どうだ。一時、この高温を感じないように気を可怪しくさせ……そのまま湿熱環を過ぎて緩和圏に出たとき……ハツと眼醒めるようにしたら……」

それが、いま三人が嗅いでいる『Cohoba』《コホバ》の粉だ。これは元来ハイチ島の

禁制物、《Piptadenia》《ピプタデニア》《peregrina》《ペレグリナ》“という合歓科の樹の種だ。土人は、そのくだいた粉を鼻孔に詰めて吸う。すると、忽ちどろどろに酔いしれて、乱舞、狂態百出のさまとなるのだ。いま、その《Cohoba》《コホバ》“の妖しい夢のなかで、^{ブラウー}独木舟は成否を賭け飛沫をあびながら走っている。

それから、渦中をゆくことなん時間後のことだろう。ふと、外界が朦朧と見えてきたと思うと、頬にあたる熱気を感じがちがう。オヤツ、と、キューネがふと横をむくと、舟は、大岩礁に桁先をはさんで停っている。

島だ——と彼は歓喜の声をあげた。^{ブラウー}独木舟はついに湿熱環を突破し、緩和圏中の一島に ついたのである。

*

折竹は、そこまで話してふと口を休めた。そして、隣室から手紙のようなものを持ってきて、

「これからは、キューネの手紙を見たほうがいいだろう。簡単だが、僕の話よりも切々と

胸をうつよ」

という。

*

その島は、周囲八マイルもあるだろうか。ながらく外海と絶縁していたため、ひじょうに珍しい生物がいる。その一つが、『Sprangs 《スファルギス》』だ。鳴く亀である。

亀が声を発するとは伝説だけであろうがいま、「太平洋漏水孔」のこの島のなかには歴然とそれがいるのだ。そいつは、ガラバゴス島の大亀ほどの巨ききで、四、五百ポンドの巨体をゆすりながら愛らしい声で鳴く。私は、肉も食ったが、ひじょうな美味だ。

ほかにレジウルス・ボレアリス紅 蝠 蝠 のひじょうに巨きなのがいるだけで、生物は、ただその蝙蝠と亀だけに過ぎない。そして、島の中央は礁湖になっている。

だが礁湖ラグーンには、普通外海との連絡孔が水面下にあるのが通例だが、ここでは、それが最近塞がってしまったらしい。そのため、澱んだ水が高温のため腐り、どろどろの海草や腔腸動物の屍体が、なんとも云えぬ色で一面に覆っているのだ。

まさに、これこそ死の海の景である。そこへ、赤子の手のような前世界の羊歯や、まるでサボテンみたいに見える蘇鉄の類が群生し、そのあいだを、血のような蝙蝠が飛び、鳴き亀が這うといったら、まず地球前史の風物というよりも化物の世界だろう。

こうして、地上に数百万年もとり残された島のなかへ、私たちはポツリと置かれたのだ。今では、ここを出たいとか人里が恋しいとか、そんな事はなにも思わなくなっている。

温度は、ここでもやはり高い。外辺のいわゆる湿熱環ほどではないが、多分摂氏四十度ぐらいはあろう。そのため、私たちはだんだん痴愚ばかになってゆくようだ。

実際、今のところは死なないと云うだけだ。脳力、が暑さのため減退してゆくと云うことは、なにより、お利口さんのハチロウをみれば分る。今では、日本のことも何もいわなくなつたし、第一、こう云っている私がそうではないか。あれほど、自己批判の眼をむけて触れようとしなかったナエーアと、いまは動物の雌雄のようになっていいる。

一切が、もう忘却の彼方にあるのだ。

ところで、此処へ来て私は不思議な人間になった。おそらく私は、この地上における新生物かもしれない。というのは、いつも身体を倒して斜めに歩いているからだ。ちょうど、水平とは四十五度の角度で、私は斜めにかたむきながら歩いている。またそれが、この

「太平洋漏水孔」の島での普通の歩きかたなのだ。では、一体なぜだろうか。

それは、この「太平洋漏水孔」では水平というものが、大漏斗の斜面しかないからだ。それに、いつもおなじ方向からひじょうな強風が吹いている。そのため、全島の樹木がなかば傾いて……その薙がれた角度が大漏斗の斜面と、ちょうど直角をなしているのだ。だから、そのあいだへ直立している私は、てつきり、なかば傾きながら歩いているとしか思えない。まったく、錯覚とはいえ自然天地の法則が、ここではものの見事に覆えられている。

これも、私がまったく痴愚ばかになったためか、いや、決してそうではないだろう。

海面は、黒くたかく頭上にそびえ、風と飛沫と囁音で一分の休息もない。そのなかで、私たちはだんだんに退化して、いまに鳴き亀とおなじようになるだろう。

ところが、きょう夜にかけて大颶風がやってきた。そのあと、朦朧が吹き払われ清涼の気をおぼえると、今まで忘れていたこと、感じなかったこと、また、私が是非しなければならぬことが、まるで堰切った激流のように迸しつてくる。私は寸時でも、脳力を回復したことを悦ばねばならない。

それは、私が痴愚ばかになったという第一の証拠だが、ハチロウのことをすっかり忘れてい

たのだ。私とナエーアが、この水面下の島で朽ちはててしまうのはよし。しかし、ハチロウをここで鳴き亀同様の存在にするということは、まったく何としても忍びないことなのだ。

私は、今夜ハチロウを外海へ出そうというのだ。それには、渡り鳥である鯉鳥を利用する。さらに『Cohoba』《コホバ》をハチロウにもちいて泥々に酔わせて置く。そして、そのハチロウを入れた籠を鯉鳥にひかせる。おそらく、五羽の鯉鳥はその籠をひいて、底をかすかに水面に触れながら、まっしぐらに突っ切るだろう。

愛は、ハチロウをきつと守るにちがいない。そして神も、私の天使ハチロウに倅いするだろう。

水面下の島にて

キューネ

*

私は、読みおわってからも亢奮がさめず、なんだか此処も、斜めに倒れながら歩いてい

る感じがするという、「太平洋漏水孔」^{ダブツクウ}のその島のような気がした。折竹は、にたにた笑いながら私のからだを支え、

「オイ、しつかりしろ」

と怒鳴った。私は、頭の靄がようやく霽れたように、

「そのハチロウという子は助かったわけだね。で、今は？」

「あいつかね。あいつは、時々いま重慶へ飛んでゆくよ。そして、爆薬のはいつたおそろしいウンコを置いてゆく。まったく、ニューギニア^{ダブツクウ}という『太平洋漏水孔』^{ダブツクウ}といい、よく方々へウンコを置いてゆく奴さ」

青空文庫情報

底本：「世界SF全集 34 日本のSF（短篇集）古典篇」早川書房

1976（昭和51）年7月15日再版発行

初出：「新青年」博文館

1940（昭和15）年2月号

※初出時の表題は、「太平洋漏水孔 漂流記」です。

※「[Dabukku_]」と「[Dabukku]」の混在は、底本通りです。

入力：網迫、土屋隆

校正：Juki

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「太平洋漏水孔」漂流記

小栗虫太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>